

難波宮跡・大坂城跡(NW04 - 1次)発掘調査現地説明会資料

中央区法円坂1丁目[法円坂住宅内]/2005年3月13日(日)
大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会

大阪市教育委員会と(財)大阪市文化財協会は、昨年11月から、集合住宅の建替えが予定された東西2ヶ所で調査区を設定し、発掘調査を行ってきました。調査地は、地形的には上町台地の東側斜面に当り、西から東に向かって徐々に土地が低くなっています(写真1)。また、歴史的景観からみると、古代には難波宮内裏域の東方約100mに位置し、宮域と京域の東側境界が推定される一方、豊臣期には多くの大名が屋敷を構えた大坂城三の丸の中に含まれていたと考えられます。今回の発掘調査では、難波宮や豊臣期大坂城に係わる遺構や遺物が見つかったほか、古墳時代から江戸時代にわたる人々の土地利用の過程を把握することができました。



写真1 東側に下がる地形(東調査区)



写真2 古代の谷の肩(東調査区南部)



写真3 飛鳥時代の須恵器と後期難波宮の瓦

難波宮造営以前の遺構と遺物

当該期の遺構としてはこれまでに、調査地の北側に広がる東方官衙域の下層で古墳時代の竪穴住居や柱穴がまとまって見つかっています。今回の調査でも、西調査区南西部で複数の柱穴を検出しました。また、後世の遺構の中からも古墳時代の土器が一定量出土しており、本来遺構が密に分布したと推測されました。

難波宮に係わる遺構と遺物

東調査区の南東部では、前期難波宮造営時に埋まった谷の一部を確認しました(写真2)。谷の中の土を観察したところ、下部では水が流れ、肩の土が削りとられながら少しずつ自然に埋まっていった一方、上部は意図的に埋め戻し・整地が行われたことがわかりました。難波宮の造営に際し、より広い平坦地を確保するために周辺の小規模な谷が埋め戻されたことはこれまでの調査でも知られており、今回の谷もその一例として捉えることができるでしょう。また、谷を埋めた土の中からは、古墳時代から飛鳥時代にかけてのたくさんの土師器や須恵器(写真3、右下)が出土したほか、試掘調査では多量の木屑とともに「君」「日子」の墨書がある木簡が見つかっています。

さらに、東調査区の北西部では柱穴が2基見つかりました(写真4)。柱を据えるために掘られた穴の平面形は一辺0.9~1.1mの方形で、その中央には直径0.35mの柱の痕が残っていました。2つの柱の間の距離は約2.9mで、約10尺に相当します。これらの柱は、建物や柵に伴うものと考えられます。しかし、江戸時代後

期(18世紀後半)に行われた土取り作業により、周囲にあった古代の地層は取り去られ、どのような構造物が建っていたかを復元するには至りませんでした。後期難波宮(8世紀中ごろ)に伴う遺構としては、西調査区西部でほぼ正南北方向の溝が1条見つかりました(写真5)。後世に上部が削り取られ本来の規模を保っていませんが、幅が3.5~5.1m、深さは最も残りのよい部分で約0.5mあります。溝の特徴としては、底が平坦で水が流れたようすが見られないこと、両肩とも2段になっているが西側に比べ東側の傾斜がゆるいことが挙げられます。また、今回の調査地から北へ約100mの延長線上でも同様の南北溝が確認されているほか、南側へ約30mの地点では東西方向の溝につながると考えられます。以上から、溝は何らかの区画に伴うものと推測しています。そのほか、埋土の上部からは縄目タタキが残る平瓦がまとまって出土しており、近くに総瓦葺の建物があったことがわかります。

中世の遺構と遺物

前述した区画溝の東側約4.5mの位置で、鎌倉時代の瓦器を含む幅約0.9m、残存する深さが約0.3mの南北溝が見つかりました。西調査区東部では平面形が円形の柱穴からなる、東西3間、南北3間以上の掘立柱建物と、その脇で水溜めに使われた可能性が考えられる方形の土壌を検出しました。瓦質土器の羽釜や甕が出土したことから、土壌の時期は室町時代と考えられます。周辺調査では、中世の田畑が数多く確認されていますが、今回の調査で調査地付近に居住域があったことがわかりました。

豊臣期の遺構と遺物

東調査区では大規模な造成工事の跡が見つかりました。半径が5~6mの穴が東西・南北方向連なる形で、L字状に上町台地の洪積層が3m近く掘り窪められています。壁はまっすぐに削り落とされ、底は平坦になっています。当初は堀の可能性を考えましたが、雑壇状の造成の一部なのかもしれません。この大規模な落ちは豊臣後期に一気に埋め戻されています。西側調査区では井戸や土塙、柱穴など見つかり、屋敷地が広がっていたことがわかりました。井戸の中からは金箔押瓦や志野焼・唐津焼・青花といった陶磁器類のほか、箸や曲物などの木製品が出土しました。



写真4 古代の柱穴(東調査区北西部)



写真5 後期難波宮区画溝(西調査区)
上は全景、下は断面

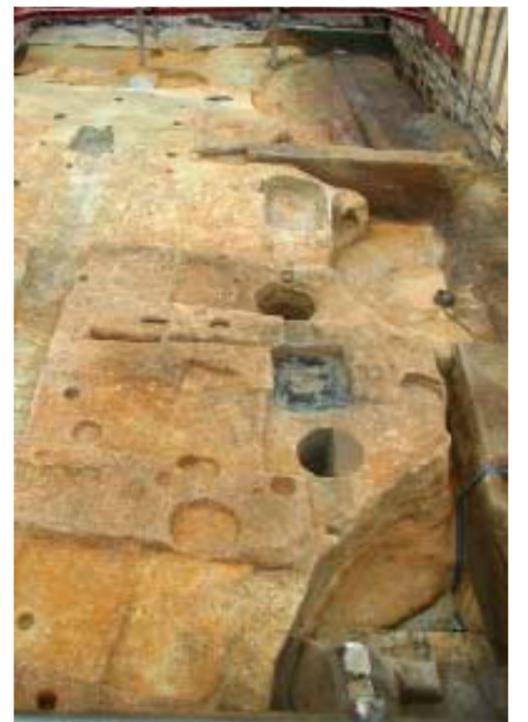
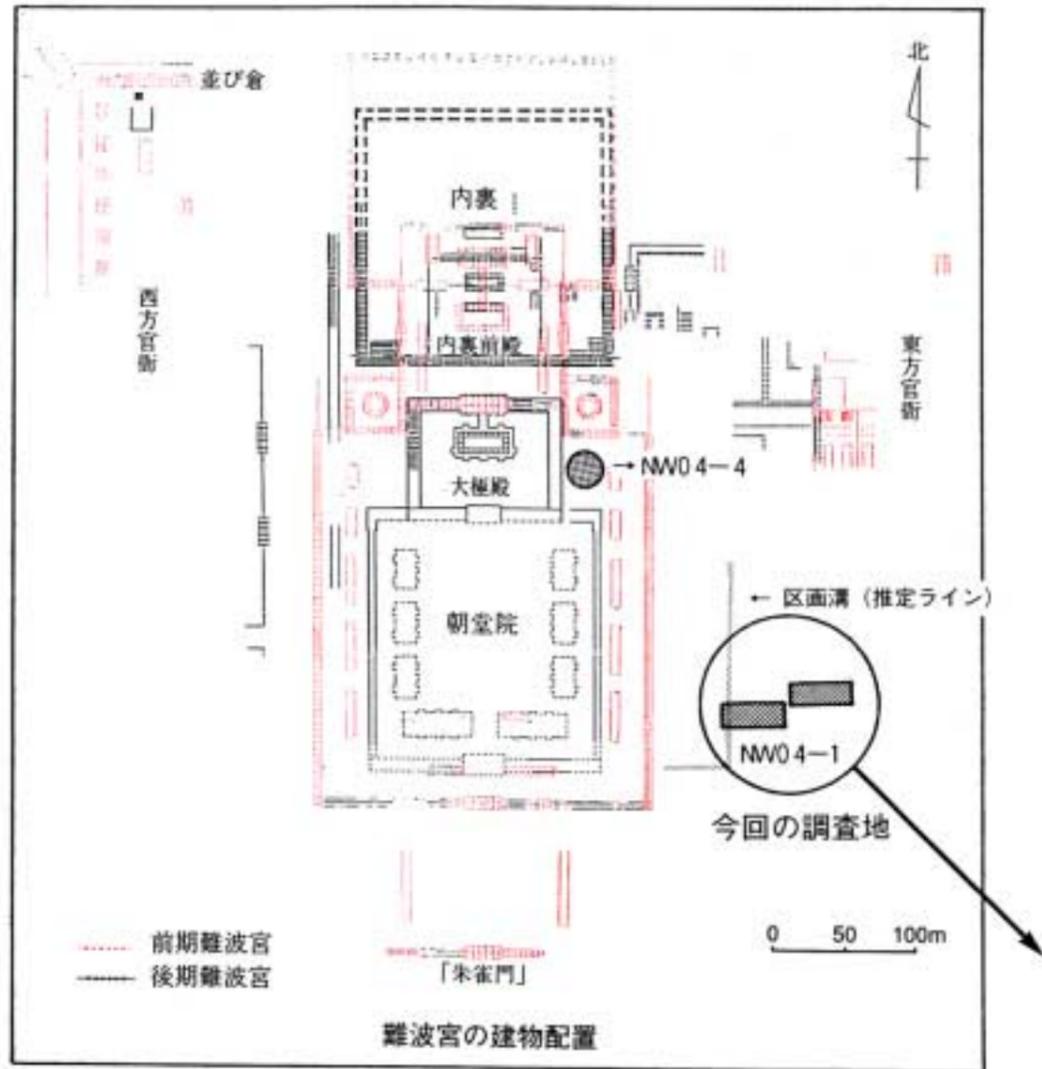


写真6 豊臣期の落ち(東調査区南西部)



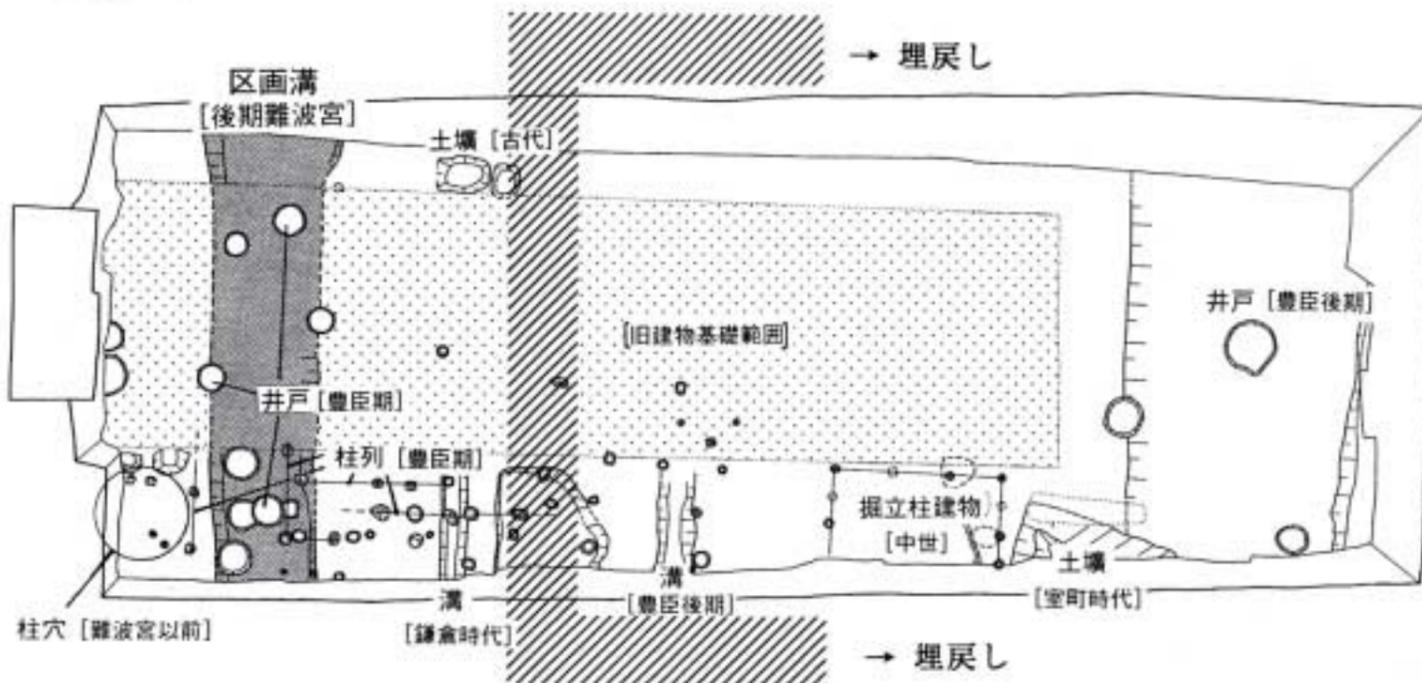
江戸時代の遺構と遺物

江戸時代の地図をみると、調査地周辺は全時代に渡って大坂城代の屋敷地として描かれています。今回の調査では江戸時代前期(17世紀)に遡る遺構は井戸だけで希薄でしたが、18世紀の後半から幕末にかけては石組溝(写真7)・井戸・ゴミ穴などたくさんの遺構や遺物が見つかりました。18世紀の終わりから19世紀のはじめには大きな土地利用の改変が行われたらしく、調査地の西側は屋敷地として利用され続けますが、東側は大規模な土取りが行われ、その上では畑がつけられていたようです。



写真7 江戸後期の石組溝(東調査区)

西調査区



東調査区

